

セビーリャの通商院とヌエバ・エスパーニャの コンスラードについて

——商事裁判管轄権をめぐる——

中 川 和 彦

1

コロンブスのアメリカ「発見」は旧世界と新世界の間の交易活動を生ぜしめる。スペインは新世界、すなわちインディアスの富を獲得し、インディアスに入植したスペイン人の生活用品をスペインは輸出する。この交易において、スペインは、国家というよりも、王権が独占をはかり、重商主義、むしろ、重金主義 (bullonistas)¹⁾ と表現される姿勢をとる。

スペインというよりカスティーリャは、1503年に、早くも、国の機関として、通商院を設置し、他方、商人の組織として、インディアスの地のものまで含めて、コンスラードをおき、商業交易活動を統制・規律する。

この通商院は商人の取引について裁判管轄権を有し、また、インディアスのコンスラード（商人の同業組合）は、本国のそれと同じく、裁判管轄権が認められ、これらを通じて、「商法」がインディアスの地で展開する。

筆者は、このインディアスにおける「商法」の展開を考察するにあたり、本稿で、さしあたり、通商院およびコンスラードの商事裁判管轄権の展開を、地域をヌエバ・エスパーニャ（現在のメキシコ）にしぼりながら、瞥見しようとするものである。その叙述を、重商主義の一例とされる、スペインとインディアスの間の商業交易の素描から始める²⁾。

1) Fernando Vázquez Armino, *Derecho Mercantil. Fundamentos e Historia*, 1977, México (Editorial Porrúa, S. A.). p. 112; 細野昭雄『ラテンアメリカの

経済』, 1983, 東京大学出版会, 11 ページ。

- 2) 同旨。Carlos Díaz Rementería, *Instituciones Económicas y Mercantiles, en [Historia del Derecho Indiano, 1992, Madrid: Editorial MAPFRE, S. A.], p. 369.*

2

1 コロンブスの「発見」からしばらくの間、大西洋をまたぐ商業交易は、スペイン本国からインディアスの植民地への人員および補給物資の輸送の言わばついたりにすぎなかった。入植者たちはパンのための小麦、ワイン、オリーブ油、伝統的な甘味、馬、その地の家畜を必要としていた。これに対し、当時、インディアスには、金以外には交換するものはほとんどなかった。そのため、インディアスに航海した船舶の多くは、復航に運送するものではなく、たとえば、1520年に、インディアスに到着した船舶 71 隻の半数は現地で売却され、スペイン本国に帰らず、カリブ海の航海に用いられた、と言われる¹⁾。

2 征服、略奪、アメリカ大陸本土への進出、その後のメキシコおよびペルーの銀鉱山の開発、これらが大西洋貿易の規模および性格を一変させる。1530年後、多くのスペイン人が冒険と富を求めてインディアスに押し寄せる。これに加えて、入植しているスペイン（クリオーリョ）、また、スペイン文化に編入された先住民および混血人（メスティーソ）たち、このような人たちがヨーロッパ製品の市場を拡大する。1506年から1550年の間に取引量がおおよそ10倍に拡大したと言われる。他方、メキシコ、ペルー、およびヌエバ・グラナダ（コロンビア）の金銀などの貴金属に加えて、カリブ海周辺で産出される染料、薬草、砂糖、タバコ、チョコレートなど、インディアスからスペイン向の輸出品が増加する²⁾。

3 スペインの対インディアス商業交易が隆盛であったのは1504年から1610年で、18世紀には落ち込む。この拡大の趨勢は、時期的には、征服

・殖民・鉱山開発の発展の時期と一致しており、ヨーロッパ製品に対する市場の初期の成長は、移住などによるスペイン人、また、スペイン文化に編入された混血人の人口の増加の反映でもあった。これに対し、衰退は、植民地市場へのスペインの供給能力の不足、密貿易、外国の圧力、また、植民地の、輸入品に対する代替品製造能力の成長に関連した。

1550年から1562年にかけて、大西洋貿易は、一時、下降線をたどる。これは、先住民の財産を略奪しつつ、銀の産出量がスペインからの輸入に引き合うに足りなかったからであり、インディアス向けのスペインの輸出が減少したのは当然であった³⁾。

4 1560年代、アマルガム法の採用により、銀の産出量が急増し、1592年、大西洋貿易は頂点に達する。しかし、その頃、インディアス現地の農業も発展し、小麦、ワイン、オリーブ油の生産も増加し、農産物の輸入は減少に転ずる。これに代って、織物、工業製品の輸入が増加する⁴⁾。

1570年代、マニラとの貿易取引が定期的に始り、1582年、スペインはこれを制限するに至る⁵⁾。1590年代、メキシコの商人はペルーのリマ、あるいはアジアとの交易の仲継の役割を果たすようになる。アジアから中国の絹、陶磁器などが輸入され、メキシコから銀が輸出される。東アジアの貿易の決済(?)にメキシコの銀貨が用いられるようになる⁶⁾。

5 インディアスの富の規模がまだ明白でなかった頃、カステイーリャの王権は、インディアスとの商業交易を自己の財政上・政治上の利益のために統制しようとする。そのため、1503年、インディアスとの貿易商品は、アンダルシアのセビーリャ港で船積みし、陸揚げすることを義務づける。そして、同じ年、セビーリャに通商院を設置し、インディアスとの商業交易をその監督の下においた⁷⁾。

6 1542年8月23日付の王の処置規定(Real Provisión)をもって、セビーリャにコンスラードがおかれた。これは、ブルゴス、バルセロナなどの商業活動がコンスラードの設置により繁栄していることにならってのセビ

ーリヤの商人たちの要請に応えるものであった⁸⁾。

セビーリヤのコンスラードも、商人たちの利益を代表する・擁護することを目的とする同業組合であり、通商院の委任をうけて、インディアスとの交易の統制、規律にあたったのみならず、種々の租税公課の徴収も代行し、また、紛争解決のための裁判権も行使した。

7 16世紀末のオランダの独立、イギリスの台頭、加えて、海賊（フランスの）の跳梁により、スペインは大西洋貿易の船舶の保護のため、護送船団方式を採用する。1543年からこの方式による航海が義務づけられ、その経費のため軍艦護衛税 (avería) が課せられる。

この方式の下で、1561年から2つの船団が編成される。第1の船団（いわゆる flotas）は、5月、ヌエバ・エスパーニャ向のヨーロッパの製品を積んで、ベラクルスを目指して出航する。帰路の積荷はメキシコの銀、染料、皮革などであった。第2の船団（いわゆる galeones）は、8月、セビーリヤを出航し、ヌエバ・グラナダ（現在のコロンビア）のカルタヘナに向い、そこから、さらに、パナマに航海を続けた。パナマのノンブレ・デ・ディオス (Nombre de Dios)（現在のポルトベロ Portobelo）で、商人たちは、ペルーから海路（太平洋）、さらに、パナマ地峡の山岳を越えて運ばれた銀と引き換えに、輸入品を受けとる。これらの商品は、また、同じ道を、ロバの隊列で地峡の山岳を越え、パナマ市から、海路、ペルーのカリヤオ (Callao)（リマの外港）まで運ばれた。ペルーの商人は、実入りのいい取引の後、商品を南米の各地に送り出した。当時、開港を許されていなかったブエノス・アイレスの人々は、チリからアンデスの山々を越え、さらに、パンパスの平原を横断して運ばれた商品を手入するのであった。

メキシコおよびペルーの銀を積込んだ2つの船団は、キューバのハバナに集結し、翌年の春、スペインへの帰途につくのであった⁹⁾。

8 この護送船団方式の定期的入港の商品供給は、豊富な資金を運用できるコンスラードの商人に有利で、彼らは輸入商品の高価格安定に努力す

る¹⁰⁾。

メキシコ市およびリマ市のコンスラード（1592 年，1613 年に認可）は輸入商品，その多くは織物を大量に買入れ，それを直営店，あるいは小売業者を経由して，販販する。一部はコレヒドール（代官）やアルカルデ・マヨール（郡奉公）を経て，先住民に売られた¹¹⁾。（いわゆる商品のレバルティミエント *repartimiento de bienes*）¹²⁾

9 やがて，16 世紀末から 17 世紀の始めにかけて，この護送船団方式は衰退し，定期的な船団の発航は減少し，1680 年から 1699 年の間，パナマ向に発航した船団は 4 しかなかったと言われる。これは，スペインの経済力の低下，また，オランダ，イギリスの海軍力の強化を示すものであった¹³⁾。

1) Mark A. Burkholder and Lyman L. Johnson, *Colonial Latin America*, Third edition, 1998, N. Y. and Oxford (Oxford University Press), p. 144.

2) Burkholder and Johnson, *ibid.*

3) Burkholder and Johnson, *ibid.*

4) Burkholder and Johnson, *ibid.*

5) メキシコのアカプルコ港とフィリピンのマニラとの間の太平洋を横断する定期貿易は 1565 年（永禄 8 年）に始まり，1815 年に終了する。この航海に用いられた船舶が *Nao de China* または *Galeón del Pacífico* と呼ばれ，マニラで建造されたと言われる。1613 年（慶応 18 年）の支倉常長のローマへの旅は，この貿易船に便乗して行われた。詳細は，手もとにある下記を参照されたい。

Fernándo Benítez y otras, *El Galeón del Pacífico. Acapulco - Manila 1565~1815*, 1992, México (Gobierno Constitucional del Estado de Guerrero).

駐日メキシコ大使館編『日墨修交通商条約締結百周年記念 アカプルコの交易船ガレオン展』，1988 年，駐日メキシコ大使館。

松田毅一『伊達正宗の遣欧使節』，昭 62 年，新人物往来社。

6) 東洋に流布したのは 9 レアル貨，通称タレルあるいはドラーで，フィリピン航路による。詳細は下記を参照されたい。

小葉田淳『金銀貿易史の研究』，1976 年，法政大学出版局，121 ページ以下。

7) Burkholder and Johnson, *op. cit.*, p. 146.

- 8) Lutgardo García Fuentes, *El Comercio Español con América (1650~1700)*, 1980, Sevilla (Escuela de Estudios Hispano-Americanos/Diputación Provincial de Sevilla), p. 23.
- 9) Burkholder and Johnson, *op. cit.*, p. 147: Antonio Dougnac Rodríguez, *Manual de Historia del Derecho Indiano*, 1994, México (Universidad Nacional Autónoma de México), p. 90
- 10) Burkholder and Johnson, *op. cit.*, p. 148.
- 11) Burkholder and Johnson, *op. cit.*, p. 147.
- 12) 中川和彦『ラテンアメリカ法の基盤』, 2000年, 千倉書房, 321ページ。
- 13) Burkholder and Johnson, *op. cit.*, 148.

3

1 インディアスと呼ばれた新領土の獲得は当時のカスティーリヤにとり、予期していたところを、はるかに越えるもので、その行政あるいは統治は、対処にせまられて、その時になって、慌てて準備されたものであった。このことは筆者は別著で指摘している¹⁾。商業交易の規制もそうであった²⁾。

2 通商院の設置まで、カスティーリヤのカトリック両王（フェルナンド王とイサベル女王）に代って、新世界への探検行あるいは入植の諸問題の衝にあたったのは、ロドリゲス＝デ＝フォンセカ師 (Juan Rodríguez de Fonseca) (1451年生, 1524年没) であった。ロドリゲス＝デ＝フォンセカは名門の出自で、1484年、イサベル女王の王室付司祭に任命され、カトリック両王の信任厚く、正式の官職に就くことなく、カトリック両王に代り、両王の名において、インディアスの諸問題の処理にあたった³⁾。

3 インディアスの経営について最初に定められた法規定は⁴⁾、コロンブスの第2回の航海の出発の前に発せられた、1493年5月29日の「インディアスに発航し、新入植地で良き統治をなすため、クリストバル・コロンブス提督宛のカトリック両王の訓令」(Instrucción de los Reyes Católicos al Almirante don Cristóbal Colón, así para el viaje que iba hacer a las Indias como para el buen gobierno de nueva colonia (Barcelona a 29 de

mayo 1493)) である⁵⁾。

この訓令は全文 18 項から成っており、細部にわたって規定し、随所に、前述した「フォンセカ、コロンプス両名の合意の下で」という文言が目立つ。

この訓令が発せられる数日前に、カトリック両王、コロンプス、またはフォンセカの許可なしに、何人も、また、いかなる物品も、インディアスに運送できない、旨を命ずる王の処置規定が発せられている⁶⁾。

これから、対インディアスの商業交易の王権による規制の萌芽を推察することができよう。

4 探検・征服の進展にともない、対処すべき問題が山積する。ロドリゲス＝デ＝フォンセカ自身も多忙で（1502 年、カトリック両王の息女カタリーナ＝デ＝アラゴン姫のイギリスへの輿入れに際し、随行する）⁷⁾、ロドリゲス＝デ＝フォンセカの協力者であったピネロ (Francisco Pinelo) が、ポルトガルの先例にならって、通商院の設置を提言する。

1498 年に、バスコ・ダ・ガマ (Vasco da Gama) がインドのカリカットに到着し、インド航路が開拓され、輸入される香料を一手に販売する機関として、リスボンにカーザ・ダ・インディア (Casa da India) が設置される⁸⁾。このことが通商院の設置を触発したようである⁹⁾。

その頃、需要の多かった香料をインディアスが産出するものと期待されており、その香料を王室の独占として、通商交易することも通商院設置の一つの理由であった。また、カスティーリャは、すでに、アフリカの大西洋沿岸と交易しており、交易商品の 5 分の 1 を徴収するための機関がカスティーリャにあったことも、通商院の前身と考えることもできよう¹⁰⁾。

5 1503 年 1 月 20 日付で、カトリック両王が発した条例 (Ordenanzas) により、通商院 (Casa de Contratación) がセビーリャに設置された。この条例は全文 20 件の法条から成り、通商院の主要な目的は、新世界発見の航海にカトリック両王の出捐した出資の見返り分、さらに、インディアス

との交易に関連して、コロンブスと約定した留保の確保および管理であった。通商院は、その名称が示すように、カトリック両王の特別の商館 (factoría) となることが予定されていたようである¹²⁾。

通商院の役職として商務官 (factor), 財務官 (tesorero) および記録官 (contador o escribano) の三者が規定された (1503 年条例第 4 の法条)。

商務官は、その名の如く、商取引にあたり、財務官は物品・商品・金銭の領収・管理にあたり、記録官は帳簿に物品・商品・金銭の出納を記録した (第 4 の法条)。商務官と財務官の重要な職務は交易に適した商品の選定、船舶の発航時期の決定 (第 6 の法条)、船長、船舶に乗込む書記の任命 (第 8 の法条) で、記録官には、インディアスから輸送される金を商務官と財務官の立ち合いの上で領収し、その計算書をカトリック両王に報告する義務があった (第 12 の法条)¹³⁾。

1510 年 6 月 15 日、通商院についての新たな条例が発せられる¹⁴⁾。これは、1503 年の条例より長く、35 の法条から成り、1503 年条例の繰り返しもあったが、通商院の業務について、執務時間の指示 (第 1 の法条) など、具体的なことにふれるものもあった。

こうして、1503 年の条例で輪郭が明確でなかった通商院の職務権限は、時がたつにつれて、次第に鮮明になっていく¹⁵⁾。他方、通商交易の困難さというものから、通商交易は、通商院の監督の下で民間人に委ねられるようになる¹⁶⁾。そして、通商院は商館ではなく、対インディアス商業交易を統制する一種の官庁に変身し、広範な行政・立法および司法権が与えられる¹⁷⁾。

こうして、王権の利益の擁護に加えて、船舶の機装、インディアス向に出発する探検隊・船団の企画・許可、植民地に移住を希望するスペイン人移民の規律、インディアスとの商業交易の許可、商品の海上運送の監視・規律、運送に関する租税公課の賦課・徴収、植民地での道路・橋梁・旅宿等の計画・建設、さらに、商人間の紛争、対インディアス商業交易につい

て制定された規則・措置違反を審理し、判定することも通商院の権限とされた¹⁸⁾。

6 1503年の条例は通商院の司法機能について明示していない。しかし、通商院は、当初からこの機能を、事実上、有していたようである。

1508年、女王フアナ (Juana La Loca) (在位 1504年～1555年) の下で発せられた条例は、「発見」後、カトリック両王が付与したものとしての司法権について言及している¹⁹⁾。コロンブスが提督かつ副王として、漠然としたものにせよ、司法権を与えられていたことは事実である (第1回の航海に先立って、カトリック両王とコロンブスとの間で締結されたサンタ・フェ協約書の第4項)。

ともあれ、通商院は、当初から、規則の違反に関する事案、また、商人および対インディアス海運関係者の間の紛争について司法権を行使していたようである²⁰⁾。その結果、程なく、普通の裁判所の管轄権に抵触し、軋轢を生ずる。

1508年、フェルナンド王 (フアナ女王の精神異常のため、攝政の地位にあった) は、通商院にインディアス関係の事案の裁判権を付与しており、セビーリャ市関係者に関与しないことを求める、王の処置規定を発する²¹⁾。

通商院の裁判管轄権は、1511年の条例で定められ、基本的には、インディアスとの商業交易および航海に関連する事案についての民事および刑事裁判管轄権が確認された。そして、裁判の審理には、通商院の役職三役、すなわち、商務官、財務官、および記録官が「役職裁判官」(jueces oficiales) としてあたるものとし、それを補助するものとして、法律顧問 (asesor letrado)、監察官 (fiscal)、書記官 (escribano) などがおかれた²²⁾。

7 1524年8月1日、インディアス諮問会議 (Real y Supremo Consejo de las Indias) が設置される。その主たる職務は、インディアスに関する事項についての王権への意見の具申であって、立法、行政、司法、財政、および軍事にわたる広範なものであった²³⁾。

司法面では、インディアス諮問会議は、民事および刑事両者について、最高裁判所であった。こうして、通商院は、裁判所として、その「判決」はインディアス諮問会議に上訴が許されるという意味で、他の機関から独立した存在となる²⁴⁾。すなわち、通商院の判決の執行をめぐる、セビーリャの（聴訴院の）裁判官との紛争が、それぞれを所管するインディアス諮問会議とカスティーリャ諮問会議の間の紛争となっていたが、1539年の条例はこれに終止符を打つ。

この条例により、通商院は、インディアスとの商業交易および航海から派生する訴訟の管轄権を有するが、4万マラベデイスを越える事案の訴はインディアス諮問会議が管轄することになる。

8 1543年8月23日付の国王カール5世（スペイン国王としては、カルロス1世 Carlos I）の王の処置規定により、セビーリャのコンスラードの設置が認可される。このコンスラードの正式の名称は *Universidad de Cargadores de Indias*（インディアス運送人同業組合）という^{25), 26)}。

このコンスラードの設置は、インディアス交易の独占にともなうセビーリャにおける商業取引の拡大により、通商院に持込まれる紛争の急増を背景にして、セビーリャの商人たちが、バルセロナ、バレンシア、ブルゴスのコンスラードの先例にならう形で請願した結果であった²⁷⁾。

コンスラードは、当初、通商院の一室で業務を始め、通商院とは密接な関係にあった。そして、インディアスにおける商取引に起因する紛争を管轄した。しかし、他の司法機関、特にセビーリャの聴訴院との関係もあり、その立場は微妙であった²⁸⁾。

コンスラードの組織および運営について、通商院の条例 (*Ordenanzas de la Casa de Contratación*) に定められている²⁹⁾。これによれば、セビーリャのコンスラードが管轄したのは、インディアスに運送される商品に関する商人間、会社と代理商間の一切の紛争、売買、交換、保険、会社、傭船、および代理権に関する一切の紛争、さらに、インディアスにおける交渉、

交易、および商品に関するすべての事案で、コンスラードは、商人の流儀で、遅滞なく、簡潔な手続で、聴聞、判定することになっていた（インディアス法令集成第9編第6章第22の法）。

紛争の場合にとられる手続は、地のコンスラードと同様に、簡単であった。商人から互選された1名の頭 (prior) と2名の領事 (cónsul) により構成される裁判所が、略式で、すなわち、形式にわずらわされることなく、迅速に、その管轄する事案を判定した³⁰⁾。

9 通商院のためと言われる商業交易の「独占」は、1790年6月18日付の勅令 (real decreto) により廃止されるまで、約3世紀近く続いた。もっとも、その廃止の前から、徐々に通商院はその権限または権威を失いつつあった。その原因として、いろいろのことをあげることができよう。たとえば、アメリカ（インディアス）の若干の地への発航の認可権を地の機関（Caracas 向に *Compañía Guipúzcu* に、また、Campeche 向に *Compañía de Galicia* に）に付与したことである。また、インディアスとの通商交易を、セビーリャ以外の港（Cádiz, Alicante, Cartagena, Málaga, Barcelona, Santander, La Coruña および Gijón）に認めたことである。そして、これに追い討ちをかけたのは、1778年10月12日付のカルロス3世の通商交易の自由化のプラグマーティカ（王詔）であった³¹⁾。

1) 中川，前掲書，271 ページ。

2) 細野，前掲書，12 ページ。

3) ロドリゲス＝デ＝フォンセカについて下記を参照されたい。

Almudena Hernández Ruigómez, Rodríguez de Fonseca, Juan (1451~1524), en *[Enciclopedia de Historia de España dirigida por Miguel Artola, IV : Diccionario biográfico, 1991, Madrid : Alianza Editorial, S. A.], p. 739y sgte.*

上の人名辞典のタイトルのように、「ロドリゲス＝デ＝フォンセカ」が正確な姓である。一般に、たとえば、後掲する1493年5月29日付の「指令」（本章の注5）では「フォンセカ」と呼称してあるが、筆者は、本稿では、正式の姓で呼称する。

4) José Cervera Pery, *La Casa de Contratación y el Consejo de Indias (Las*

- Razones de un Superministerio*, 1997, Madrid (Ministerio de Defensa), p. 21.
- 5) 訓令の全文を下記が収録する。
Francisco Morales Padrón, *Teoría y Leyes de la Conquista*, 1979, Madrid (Ediciones Cultura Hispánica del Centro Iberoamericano de Cooperación), p. 67 y sgtes. ; José Sánchez-Arcilla Bernal, *Instituciones Político-Administrativas de la América Hispánica (1492~1810)*, 1999, Madrid (Servicio de Publicaciones Universidad Complutense), p. 95 y sgtes.
- 6) Cervera Pery, *ob. cit.*, p. 21.
- 7) Hernández Ruigómez, *ob. cit.*, p. 239.
- 8) C. R. Boxer, *The Portuguese Seaborne Empire 1415~1825*, 1969 (Published in Pelican Books 1973), Middlessex (Penguin Books Ltd.), p. 60.
- 9) Antonio Muro Orejón, *Lecciones de Historia del Derecho Hispano-Indiano*, Presentación : José Luis Soberanes Fernández, Prólogo : Rafael Diego-Fernández S., 1989, México (Miguel Ángel Porrúa), p. 265.
- 11) Dougnac, *ob. cit.*, p. 87.
- 12) Morales Padrón, *ob. cit.*, p. 246.
- 13) Dougnac, *ob. cit.*, p. 88.
- 14) 条例を下記が収録する。
Morales Padrón, *ob. cit.*, p. 259 y sgtes.
- 15) Dougnac, *ibid.*
- 16) Dougnac, *ob. cit.*, p. 89.
- 17) Fernando Vázquez Arminio, *Derecho Mercantil. Fundamentos e Historia*, 1977, México (Editorial Porrúa, S. A.), p. 113.
- 18) Vázquez, *ibid.*
- 19) Clarence Henry Haring, *Trade and Navigation between Spain and the Indies in the Time of the Hapsburgs*, 1918 (Reprinted 1964), Gloucester, Mass. (Peter Smith), p. 40.
- 20) Cervera Pery, *ob. cit.*, p. 138.
- 21) Cervera Pery, *ibid.*
- 22) Muro Orejón, *ob. cit.*, p. 268 y sgte. ; Cervera Pery, *ibid.*
- 23) 中川, 前掲書, 296 ページ。
- 24) Haring, *op. cit.*, p. 42.
- 25) Vázquez, *ob. cit.*, p. 114.
- 26) García Fuentes, *ob. cit.*, p. 23.
- 27) Mercedes García Fernández, Consulado de Sevilla, en [*Enciclopedia de*

Historia de España dirigida por Miguel Arlota, V: Diccionaria temático, 1991, Madrid: Alianza Editorial], p. 344.

- 28) Enriqueta Villa Vilar, *El Poder del Consulado sevillano y los hombres de comercio en el siglo XVII: una aproximación*, en [*Relaciones de Poder y Comercic Colonial*, 1999, Sevilla: Escuela de Estudios Hispano-Americanos], p. 9.

- 29) この条例は「インディアス法令集成」第9篇第6章に組入れられている。

Recopilación de Leyes de los Reynos de las Indias, Tomo Tercero, (Reproducción en facsimil de la edición de Julian de Paredes de 1680), 1973, Madrid (Ediciones Cultura Hispánica), p. 165 y sgtes.

- 30) Vázquez, *ob. cit.*, p. 114.

- 31) Vázquez, *ob. cit.*, p. 116.

4

1 1592年6月15日付のフェリーペ2世(Felipe II)(在位1556年～1598年)の勅令により、メキシコ市のコンスラードの設置が認可された¹⁾。これは、メキシコ市のカビルド(市議会)の要請に応えるものであり²⁾、スペイン本国、特に、カディスの商人たちの活動に圧倒されていたメキシコの商人たちが、それに対抗するため、という事情もあったようである³⁾。

コンスラードの組織および運用を規律する条例(*ordenanzas*)の準備に設置の認可時に2年の猶予が与えられるが⁴⁾、コンスラード内部で、ブルゴスやセビーリャのコンスラードの条例を参考に起草され、これが、インディアス諮問会議の1603年6月19日と1604年7月4日の裁決(*autos*)で監修の後、1604年10月20日、フェリーペ3世(在位1598年～1621年)により認可される⁵⁾。

2 条例前置文の文言によれば、メキシコのコンスラードの正式の名称は、次のように、長いものである。「メキシコ市、ヌエバ・エスパーニャ、ガリシア新王国の諸地方、ヌエバ・ビスカーヤ、グアテマラ、ユカタン、ソコヌスコの商人、ならびにカステイーリャ諸国、プルー、フィリピン諸島、

および支那で商う商人の同業組合」(Universidad de los Mercaderes de esta Ciudad de México, é Nueva España, y sus Provincias del Nuevo Reyno de Galizia, Nueva Vizcaya, Guatemala, Yucatán, y Soconusco, y de los que tratan en los Reynos de Castilla, Pirú, Islas Philipinas y China) という⁶⁾。

この名称があまりにも誇大であるとして、条例を監修した裁決は、フィリピン、支那の削除を命じている⁷⁾。

3 条例には、コンスラードの管轄に関する明文の、具体的な文言はなかった。前述したコンスラードの名称から推測するしかなかった。その司法管轄権は、ヌエバ・エスパーニャ、ヌエバ・ガリシア、グアテマラ、ソコヌスコ (今のチャパス) およびユカタンに及んだ、と言われる⁸⁾。

4 メキシコのコンスラードの職務は、大ざっぱに言って、立法、司法、行政、財政、および軍事の5部門に及んだ⁹⁾。コンスラード設置の目的が商業の保護・振興であり、商事に関する一般の利益となる事業の執行にあたった。病院・道路・橋梁の建設もそうであったし、軍艦保護税の徴収、スペイン本国からの商船のベラクルス港入港の確認もあった¹⁰⁾。

しかし、コンスラードの主要な機能は司法であった¹¹⁾。

5 メキシコのコンスラードの組織および訴訟手続は、セビーリャのコンスラードのそれとほぼ同じ、商人から選ばれた1名の頭と2名の領事が裁判所を構成した¹²⁾。

メキシコのコンスラードの裁判管轄におかれたのは、商事または、商事に関連する事案についての商人間の紛争であって、非商人間、または、商取引と無関係の事案についての商人間の紛争には及ばなかった。(1677年3月23日付裁定)¹³⁾。そして、商取引に起因する、商人と非商人との間の紛争の場合、商人が被告であれば、コンスラードの裁判管轄に服し、逆に、商人が原告であれば、通常の裁判所の管轄であった¹⁴⁾。

6 裁判管轄の帰属をきめる基準の一つが商人・非商人の別であった。す

ると、商人とは、その頃、どのように考えられていたのであろうか。

その頃、カステイーリヤのアルフォンソ 10 世 (Alfonso X) (在位 1252 年～1284 年) が、1255 年から 1260 年の頃に制定した「シエテ・パルティエーダス」(Siete Partidas) が権威があると考えられており¹⁵⁾、その第 5 編第 7 章第 1 の法によれば¹⁶⁾、商人 (mercaderes) とは、利益を得ようと、商品を売買する者と解されており、この定義は、両替人および銀行家のように、ある物を他の物と交換する者も商人と拡張されていた。しかし、逆に、不動産 (bienes raíces) の売買に従事する者は商人ではなかった。商品は不動産ではなく、動産 (cosas muebles) とされていたからである。また、奴隷の売買に従事する者も商人ではなく、転売人 (mangón venaliciario) とされた。理性ある人 (hombres racionales) に含まれなかったからである¹⁷⁾。

商人であるためには、動産の商い (あきない)、常習的に商うこと、さらに、商人の資本の大部分を商に投下することの 3 要件が必要とされていたが、これらは、商人であることの資格要件で、これは、商人の資格、すなわち、商人として商人名簿に登録される権利を付与するのみであった¹⁸⁾。

当時の「商法」は属人的なものであり、商人名簿への登録が、事件発生の場合、商人資格有無を決定する法的基準であったのである。

しかし、1719 年 3 月 4 日付の勅令は、商人とみなされるためには、登録の要件は不要であり、前述した 3 要件を具備することのみで足り、これらの要件は、公然たる評判、十分な周知、または照介で証明できるとした¹⁹⁾。

7 1806 年 8 月 11 日、「1796 年 2 月 22 日付王令 (Real Orden) によるメキシコのコンスラードの王立裁判所規則」が発せられる²⁰⁾。この規則の内容は商事訴訟の手續に関するもので、これ以上、立入らない。ただ裁判管轄の基準の一つである商人について注目すべき規定をおいていた。すなわち、コンスラードは、商人間に発生するすべての事案および取引を審理するが、商品、また商品に附属する物品に関するものであれば、たとえ商人

として登録されていることを問わない、と定めた（1条）。

商人の定義、要件具備の判断などの問題の検討が残されているが、主観的な基準と客観的な基準の折衷ともいうべきものであろう。

8 前述にしたように、メキシコのコンスラードの設置にあたり、その条例案はスペイン本国のブルゴスおよびセビーリヤの条例を参考にして起草されている。その事情もあって、規定を欠く場合、ブルゴスあるいはセビーリヤのコンスラードの条例を適用する旨の文言がメキシコのコンスラードの条例の随所にみられる。また、インディアスに関する基本的一般法ともいうべき1680年の「インディアス法令集成」(Recopilación de Leyes de los Reynos de los Indias)の第9編のリマおよびメキシコのコンスラードに関する第46章の第45の法は、規定のない場合、ブルゴスおよびセビーリヤのコンスラードの法令または条例が遵守される、ことが定められている。

これにもかかわらず、少なくとも18世紀末に受け入れられていた慣行では、メキシコのコンスラードの条例に規定のない場合、ビルバオ条例(1737年)が適用された。この点について、1785年2月3日にメキシコのコンスラードは副王に答申している²¹⁾。

ビルバオ条例の適用は、論理的にも当然の帰結であった。当時として、もっとも完全、かつ進歩した規範であったからである。

ビルバオ条例は、正式には、「ビルバオ市の商人同業組合および通商院の条例」(Ordenanzas de la Ilustre Universidad y Casa de Contratación de la M. N. y M. L. Villa de Bilbao) という²²⁾。ビルバオの商人同業組合の創立は16世紀の初めで、17世紀に、主として、海上保険に関する条例、17世紀に為替手形に関する条例が制定され、メキシコのコンスラードが適用したのは、その後の1737年の条例である²³⁾。

この37年条例はコンスラードの組織、商事訴訟の手続のみならず、陸上および海上の実質的の商法の規律を包含する。そして、当時のスペイン

の商事法制の不備を充足し、改正をもたらすものであった。そして、事実上、スペインの商事一般法となっていた²⁴⁾。

9 メキシコ市以外、ヌエバ・エスパーニャに設置されたコンスラードについてもふれておこう。

1778年の商業交易の自由化は、結果的に、スペインとアメリカ植民地の取引にプラスとなる。特に、ヌエバ・エスパーニャの取引量は急増した。これは、同時に、商取引をめぐるトラブルも増加させることになり、その紛争解決を管轄したのはメキシコのコンスラードである。ところが、メキシコ市以外の商人、たとえば、ベラクルスやヌエバ・ガリシアの商人たちにとり、メキシコ市への往復が大きな負担となった²⁵⁾。

このような商人たちの要請に応える形で、1795年1月7日付の勅令でベラクルス²⁶⁾の、同年6月6日付の勅令でグアダラハラ（ヌエバ・ガリシアの中心都市）のコンスラードの設置が認可された。

なお、これらのコンスラードの設置の少し前の、1793年にグアテマラの、1794年にプエノス・アイレスとハバナ（キューバ）のコンスラードの設置が認可されており、特に、グアテマラのコンスラードの設置により、メキシコのコンスラードの管轄地域は縮小された。

メキシコの独位の直後の1821年8月、当時の統領アグスティン・デ・イトウルビーデ（Agustín de Iturbide）はプエブラ市のコンスラードの設置を認可した。しかし、イトウルビーデの失脚後の1824年、廃止された²⁷⁾。

1) Vázquez, *ob. cit.*, p. 116.

2) T. Esquivel Obregón, *Apuntes para la Historia del Derecho en México*, Prólogo de Julio D'Acosta y Esquivel Obregón, Tomo I, Segunda edición, 1984, México (Editorial Porrúa, S. A.), p. 466.

3) Guillermo Céspedes del Castillo, Consulado de México, en [*Enciclopedia de Historia de España dirigida por Miguel Artola, V : Diccionario temático*], p. 343.

4) Esquivel Obregón, *ob. cit.*, Tomo I, p. 466.

- 5) Vázquez, *ob. cit.*, p. 116.
- 6) 条例の全文を次が収録する。
Vázquez, *ob. cit.*, p. 181 y sgtes.
- 7) Esquivel Obregón, *ob. cit.*, Tomo I, p. 467.
- 8) Manuel Cervantes, *El Derecho Mercantil Terrestre de la Nueva España*, 1930, México (A. Mijares y Hno.), p. 28.
- 9) Cervantes, *ob. cit.*, p. 18.
- 10) Esquivel Obregón, *ob. cit.*, Tomo I, p. 467.
- 11) Vázquez, *ob. cit.*, p. 117.
- 12) Vázquez, *ob. cit.*, p. 118.
- 13) Vázquez, *ibid.* ; Cervantes, *ob. cit.*, p. 29.
- 14) Vázquez, *ibid.*
- 15) 中川, 前掲書, 200 ページ以下。
- 16) *Las Siete Partidas del Sabio Rey Don Alonso El Nono, nuevamente Glosadas por el Licenciado Gregorio López de Consejo Real de Indias de su Magestad, Ano. M. D. L. V.* (Edición facsímil por Boletín Oficial del Estado, 1974), Partidas V-VI-VII, p. 36.
- 17) Cervantes, *ob. cit.*, p. 30.
- 18) Cervantes, *ob. cit.*, p. 31.
- 19) Cervantes, *ob. cit.*, p. 30.
- 20) 規則は下記が収録する。
Vázquez, *ob. cit.*, p. 297 y sgtes.
- 21) Vázquez, *ob. cit.*, p. 120
- 22) この条例を下記が収録する。
Los Códigos Españoles Concordados y Anotados, Tomo Duodécimo, 1851, Madrid (Imprenta de la Publicidad), p. 433 y sgtes.
参照, 寺田四郎「西班牙ビルバ市商事條例」(一・二完), 『法学新報』30 卷7号, 8号(大正9年)
- 23) María Jesús Mantilla Quiza, Consulado de Bilbao, en [Enciclopedia de Historia de España dirigida por Miguel Artola, V : Diccionario temático], p. 342.
- 24) Vázquez, *ob. cit.*, p. 120 y sgte.
- 25) たとえば, 地方の先住民たちの動きが旅行者にとり一つの脅威でもあり, グアダラハラ商人にとり, コンスラードの設置が必要であったという。当時の事情は下記を参照されたい。

Ruben Villaseñor Bordes, *El Mercantil Consulado de Guadalajara*, 1970, Guadalajara.

26) ベラクルスのコンスラードの設置に関する勅令を下記が収録する。

Vázquez, *ob. cit.*, p. 242 y sgtes.

27) Vázquez, *ob. cit.*, p. 121 y sgte.

5

以上、スペイン本国とインディアスとの間の商業交易を背景に、セビーリャの通商院、およびヌエバ・エスパーニャのコンスラードの商事裁判権の展開を素描した。

重商主義の統制を受けながら、当時、インディアスとスペインの間の商業交易に従事していた商人たちは、コンスラードにより、一種の自治的な規律を試みる。無論、コンスラードの設置について王権の認可が必要であり、コンスラードの商人の活動の統制の一翼をになっていたとも言えるであろうが、コンスラードの「裁判」は法律に素人の商人による審理であり、その意味で、通常の裁判所において発展した「法」と異質の「商法」がはぐくまれる。

また、コンスラードの裁判管轄に帰属する基準の一つとして商人資格が問われるが、その場合、商人として登録という主観的な資格づけが、次第にくずれ、逆に、商人としての活動という客観的な資格づけとの折衷、あるいは、客観的な資格づけへの移行の萌芽らしきものが認められるようになる。

そして、18世紀、スペインの王朝のハプスブルグ家からブルボン家への交替もあって、商業交易の自由化が進む中で、1737年のビルバオ条例が、ヌエバ・エスパーニャも含めて、インディアスの地で受け入れられていく。この条例は、やがて、スペイン本国のみならず、19世紀に独立するラテンアメリカ諸国の商法典の基盤となっていった、と言われる。また、18世紀の後半に、株式会社の先駆形態とも言うべき交易会社がスペイン、

セビーリヤの通商院とヌエバ・エスパーニャのコンスラドについて

インディアスでも登場する。本稿で取上げることができなかったこれらの問題は、機会をみて検討したい。